

中庸

宋朱熹章句

子程子曰、不レ偏ララフレト謂ル中庸。中者天下之正道、庸者天下之定理。此篇乃孔門傳授心法。子思恐ニ其久シクシテハシコトヲ而差一也。故筆ニ之於書一、以授ニ孟子。其書始言一理、中散為ニ万事、末復合為ニ一理。放レ之則弥ニ六合、卷レ之則退ニ藏於密。其味無レ窮。皆実学也。善読者、玩索而有レ得焉、則終身用レ之、有ニ不能レ尽者一矣。

訓読 子程子曰く、偏らざるを中と謂い、易わらざるを庸と謂う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり。此の篇は乃ち孔門傳授の心法なり。子思其の久しゅうして差わんことを恐る。故に之を書に筆し、以て孟子に授く。其の書始めは一理を言い、中は散じて万事と為し、末は復た合して一理と為す。之を放てば則ち六合に弥り、之を卷けば則ち密に退蔵す。其の味窮まり無し。皆実学なり。善く読む者、玩索して得るあらば、則ち終身之を用いて尽くす能わざる者あらん。

通釈 子程子がいう、何れにも偏らぬのを中と云い、万世に亘つても易わらないのを庸という。中は天下の正しい道理で一切を統べ、庸は一定して易わらぬ天下の定まった理で条目を尽くしたものである。

此の中庸という書は孔子の門流に於て聖人が門人に傳授せられた心に關する教えである。子思は此の教えが年を経ること久しゅうなつて間違ひを生ぜんかと心配せられた故に、之を書き記して孟子に授けられたのである。此の書は始めには一理をいい、天命之を性というとのべ、中程は之を種々の方面に分散して三達徳・五達道・九經、其の他万事に就いてのべ、末には又合わせて一理とし、上天の載は声も無く、臭も無しとのべている。

此の書にあることを放つて押し広むれば、上下四方宇宙の間に行き亘り、遍満充塞して宇宙間の事一つとして此の書の外に漏れることなく、之を巻いてしまひ込めば、極めて微妙で耳目の聞見する事の出来ない所に退き藏れるのであつて、其の味は無窮無限であるが、皆實際の學問であつて、架空の議論がない。(実学より自己の学問、内外合の学問) 此の書を熟読玩味してその真意のある所を探索して之を我が身に体得したならば、一生涯之を用いても、用い尽くすことが出来ないであろう。

(P.74 テキストは間違)

(2)

三七、P.73 惠心僧都 (源信) 天慶五年(94) 寛仁二年(1017) 76歳

示寂

。大和国葛城郡当麻(たまたま)に生まれる。
。比叡山に九歳の時に登り出家し、良源(第十八代天竺王)に
解事する。十三歳で得度受戒する。
。四如歳の時に著「往生要集」と著す。
。浄土門の基礎をきずいた。

(別注)「正信念仏偈あり」(新)

三八、P.74 「大學之道^① 在明明徳^② 在親民^③ 在止於至善。」

。大學の三綱領

三九、P.75 「諸悪莫作 衆善奉行」(法句經に謳われた句)

(逸話) 唐の白居易がある老僧に仏教を問うと、

この句に答えられた。悪いことをせず、善いことを
行えば、3歳の子でも知っているが、反論すると
80歳の老人でも実行は難しいと説かれ、
得心し良といひ逸話を知りやめる。

四一、P.76 親鸞聖人 (1173 ~ 1262) 90歳 示寂

。浄土真宗の開祖。歎異抄、教行信証

。今年に、親鸞聖人 御誕生 850年、の慶讃法要
立教開宗 800年

。「親鸞 生涯と名実」 3月25日(土) ~ 5月21日(木)

於京都国立博物館

四二、p.78

遺教経、お釈迦様の臨終の際、最後の

教えるために八つの教を「八大人覺」

(少欲・知足・遠離・精進

・不妄念・禪定・智慧・不戲論)

四三、p.78

生者必滅、合者必離 (出典、『大般涅槃經』)

生ある者は必ず死に、合った者は必ず

別れるのである。この世のまじりである。この世の教の教

cf. 「平等の物」

(祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の如きあり

沙羅双樹の如きの色、成者必衰の理を

あらはし)

四四、p.80

天上天下唯我独尊 (迦吉偈)

『伝燈録』中国の禅宗の書の一つ。30巻

蘇州無天寺の道宗の作。

北宋の景徳二年(1034)に真宗に上進し

勅許によつて入藏されたことのみ

『景徳(伝燈)録』とも呼ばれる

傳燈

「正信念仏獨あり

(日本)

源信げんしん 広開こうかい 一代いちだい 教きょう

偏歸へんき 安養あんじやう 勸かん 一切いっさい

専せん 雜ざう 執しゆ 心しん 判はん 淺せん 深じん

報ほう 化け 二に 土ど 正しやう 弁べん 立りつ

極ごく 重じゆう 惡あく 人にん 唯ゆい 稱しやう 仏ぶつ

我が 亦やく 在ざい 彼ひ 撰せつ 取しゆ 中ちゆう

煩ぼん 惱のう 障しやう 眼げん 雖すい 不ふ 見けん

大だい 悲ひ 無む 倦けん 常じやう 照しやう 我が

源信げんしん 和尚かしよう 弥陀みだ 歸き

おしえかすある そのなかに

眞實まこと 報く 土に に うまるるは

ふかき信しん にぞ よると説と く

罪つみ の人ひと 々びと み名な をよべ

われもひかりの うちうち にあり

まどまど の眼め には 見えねども

ほとけはつねに 照て らします